

後撰和歌集一〇八一番

「照る月を」の歌の解釈

限なき思ひの綱のなくはこそまさきのかづら撚りも悩ま
め

阿 満 誠 一

一 はじめに

後撰和歌集卷十五(雑一)に次のような贈答がある。

家に行平朝臣まうで来たりけるに、月のお
もしろかりけるに、酒らなどたうべて、ま
かりたゝむとしけるほどに
河原左大臣

照る月をまさ木の綱に撚りかけてあかず別るゝ人をつな
が
ん

返し
行平朝臣

この贈答のうち贈歌は従来つぎのように解釈されて来た。

(一) 今照り輝いている月を枉(まさき)の蔓(かづら)
で作った綱で撚ってかけて、まだ別れたくないのに
別れて行こうとする人を繋ぎ留めたいものですよ。

(新日本古典文学体系『後撰和歌集』)

(二) 照る月をまさきの葛の綱に結び懸けて、まだ飽き足
りないうちに別れようとする人を繋ぎとめたい。

(工藤重矩氏校注『後撰和歌集』)

(一)は、「今照り輝いている月を枉の蔓で作った綱で撚ってか
けて」としているところから、「照る月」を天体の一つとして
の月ととらえて、それを「かけ」と解釈していると考えら
れる。ただし、どこに「かけ」るのかは判然としない。「照る
月」のとらえ方は(二)も同様で、「照る月をまさきの葛の綱に結
び懸けて」とあるから、やはり天体の一つであるところの月
と見ていると判断できる。おそらく「照る月」を「懸ける」
のであろう。ただし、「まさきの葛の綱に結び懸けて」は必ず

しも解りやすい記述ではない。助詞「に」が手段を表わすのか、対象を表わすのが判然としないからである。手段を表わすとすれば「結び懸ける」場所が明らかではないし、対象を表わすとすれば月を「まさきの葛の綱に結び懸け」ることの具体的な有り様が不分明である。これらの問題は「照る月」を、天体の一つである月と見ることから生じているのではあるまいか。そこで、本稿では、まず、「照る月」を天体の一つとみることの妥当性を検証し、「月の光」と解釈すべきではないかという仮説を提出してみたい。そして、「照る月」を「月の光」と見るならば、当然、それを「擦ってかけ」たり「結び懸け」ることは不可能であることになるので、両者に矛盾が生じないような「擦りかけて」の解釈も提出してみたい。

二 「照る月」の解釈

客である行平朝臣をまだ帰したくないという気持ちをも、「まさ木の綱」で繋ごうという戯れの表現に乗せたところに一首の趣向がある。ただし、単にまだ帰したくないという願望だけでなく、詞書に「月のおもしろかりけるに、酒らなどたうべて、まかりたゝむとしけるほどに」とあることから、酒だけ飲んでせつかくの月を十分に愛でないで帰る行平を不粹で

あるとして、不満の念が表明されていることは疑えないことである。河原左大臣は、月のすばらしさを行平と共有したいという意思を表明しているのである。そう考えることによつて、一首に「照る月を」の一句が存在する理由が判明する。詞書なしには、一首の「照る月」は歌中での存在の根拠を失つて、宙に浮いてしまう。

ところで、月を愛でることに行平の関心がない以上、天空の月の存在は行平を留めることができないうことにほかならない。したがつて、(二)の「月が沈まねば、人も帰るとは言はぬだろうとの理」との補足説明は説得力に欠けると言えよう。なによりも、月が沈もうとしていることをうかがわせる記述は詞書にも歌中にもない。

以上のように「照る月」を月そのものと解釈する必然性がないということになれば、「照る月」に別の解釈を付与する必要が生じてくる。

「月」には天体の一つとしての月以外に、月光の意を担う場合があることは諸辞書の語るところである。『角川古語大辞典』は「月」の項で、まず「①天体の一」との説明をかけた後に、②として「月の光。月影」をかかげて『源氏物語・明石巻』から「月入れたる槇の戸口、けしきばかり押しあけたり」の用例を挙げている。『日本国語大辞典』には「月の光」

の意味で用いられた例として、『角川古語大辭典』同様『源氏物語・明石巻』の用例と『長秋詠草』の「月冴ゆる氷のうへにあられ降り心くだくる玉川のさと」の例が挙げられている。ただ、諸辞書がまずはじめに掲げることからも明らかやうに、言うまでもなく「照る月」は輝く月そのものを指す。たとえば、

土左より、任果てて上り侍けるに、舟の内に
て、月を見て
つらゆき

照る月の流るゝ見れば天の河出づるみなとは海にぞ有ける
（後撰集・離別羈旅）

一首は、月が天の河を流れるという発想に基づくもので、月の光と見ることは不可能である。同様の発想は、

天の河水まさるらし夏の夜は流る月の淀む間もなし

（後撰集・夏）

の歌にも見られ、ここも月そのものと解釈しなければならぬ例である。それでは次の歌はどうだろうか。

照る月の秋しもことにさやけきは散るもみぢ葉を夜も見
よとか
（後撰集・秋下）

通常、明るい時に愛でるもみぢであるが、そのすばらしさは昼間だけ鑑賞するのではもったいない。はらはらと散るもみぢを夜も愛でなさいと言わんばかりに、月が澄みきつて明るいという歌である。一首は「秋の月山辺さやかに照らせるは落つるもみぢの数を見よとか」（古今和歌集・秋下）の本歌取りと見られ、「山辺さやかに照らせる」とあって、遠くから眺められていると考えられるから、本歌の月は月そのものと考えるべきであろう。しかし、一首の「照る月」は必ずしも月そのものと受け取らなければならないというものではない。「散るもみぢ葉を夜も見よ」と言わんばかりに、月の光が澄み切つて明るいと解釈することも可能である。

用例が不十分であり、説得力にも欠けることを重々承知の上で、「照る月」を月光と解釈する道を模索する理由は、先に見たように、河原左大臣の歌の「照る月」を月と見ると幾つかの疑問点が生じる上に、必ずしも月と見なければならぬ必然性が見当らないからであるが、それ以外にもうひとつある。それは行平が天空にかかっている月に関心を示さないのに、河原左大臣はなぜ、歌の中に「照る月」を出したのだらうかという疑問に端を発する。「月のおもしろかりけるに」という不満を抱いた作者は、天空の月に無関心な行平に何とか月のすばらしさを伝え、それに心を動かされて行平がとどま

ることを期待した。そのためには月が空にかかった状態を維持することは有効ではない、月のよさをじかに突き付けるしかなないと考えたのではなからうか。もっと身近に感じさせようとしたのではなからうか。歌に即して言えば、月の光とまさきの綱とを撚り合わせて、それでできた綱で行平を繋ぎ留めておこうと考えた。というより、そういうふうな歌を仕立てようとしたのではなからうかということである。「よりかけて」を(一)は「撚ってかけて」、(二)は「結び懸けて」と解しているが、ここで、「よりをかけて(撚り合せて)」とする解釈の可能性を探ってみたい。両者を撚り合わせた綱で行平を繋ぐのであれば月の光はいやでも行平の目前に迫る。月の光りともまさきの綱とを撚り合わせるなどということはもちろん現実的には考えられないことであるが、詩の表現としてはありえないことではない。

三 「よりかけて」の解釈

「よりかけて」の考察にはいる前に、一首の構造を確認しておきたい。一首は二つの行為——もちろん現実の行為ではなく、観念上のそれであるが——から成っている。一つは「まさきの綱によりかける」行為であり、今一つは、そうやって

出来た綱で「あかず別るゝ人をつな」ぐ行為である。そして時間的には前者が先であることは言うまでもない。

(一)(二)のように、「よりかけて」が、「撚ってかけて」あるいは「結び懸けて」と解釈される背景には、「よりかく」と「よりあはす」という両様の表現が存在する事実が考えられる。

(注1)

まず「よりかく」の例を示す。

浅緑糸よりかけて白露を珠にもぬける春の柳か

(古今集・春)

「よりかけて」を、「日本古典文学全集中」・「新体系本」が「よりあわせて」と解釈する一方、小松英雄氏(注2)のよう「長い糸を縫って垂らし」「白露を珠として貫いてそこに懸けてある柳の糸」として「懸ける」の意を読み取る見方が存在する。古くは本居宣長が(注3)「(ウスモエギ色ノ絲ヲ)ヨツテカケテ」と解している例がある。

一方「よりあはす」の例としては、

青柳の花田の糸をよりあはせて絶えずも鳴くか鶯の声

(拾遺集・春)

がある。鶯が鳴きながら柳の細枝から細枝へと飛びかうために、枝と枝がからまり合う様子を詠んだ歌で、まるで鶯が糸を撚り合せているようだと見立てたものであるから、「撚り合せる」と解釈するのに疑問の余地はない。

それでは「よりかく」を「撚り合せる」と解釈すべき例はないのだろうか。次の例を見て欲しい。

片糸をこなたかなたによりかけてあはずは何を玉の緒に
せむ
(古今集・恋)

右撚りの糸と左撚りの糸とをこちら側と向う側に「よりかけて」と言うのであるから、この「よりかけて」は「撚り合せて」と解釈すべきである。しかも「あはずは」と続くのであるから、「撚り合せる」と解釈するのに疑問の余地はない。

右の例から、「よりかけて」はかならずしも「撚って懸けて」と解釈する必然性はないことが明らかになったと思われる。思うに、「浅緑」の歌における「よりかけて」が「撚って懸けて」という解釈を生んだのは柳の枝の様子が関わったこと

ではあるまいか。柳の細枝はまさしく垂れ下がっていて、太枝に「懸けて」あるように見えるものである。視線が上下の動きをすると言ってもよい。そして同じ事情は「照る月を」の歌において「よりかけて」を解釈する際にも見て取れるのではないだろうか。天空にある月は人間の視線を上下の動きへと誘う。あるいは一方的に上にだけ視線を導く。そこには「青柳の」の歌が要求するような左右の視線の動きは求められない。しかも月は空にあって、目の前に下りてくるものではないという認識から「懸けて」という解釈に導かれたとは考えられないか。しかし一で想定したように「照る月」が月の光であるならば、それは地面を白く照らすものであるから、上下よりも左右の視線の動き——言い換えれば、平面的な視線の移動——を容易にする。「片糸をこなたかなたによりかけて」と同じく、平面的な目の動きである。こう見て来ると、「照る月をまさきの綱によりかけて」の解釈として、「地上に降り注ぐ月光とまさきの綱とを撚り合わせて」という解釈が浮かびあがって来よう。「返し」の「まさきのかづら撚りもなやまめ」はまさきのかづらを撚るのが困難であることを物語っている。撚り合わせれば丈夫な綱になることを前提とした措辞である。つまり、「まさきの綱」は行平を留めるのに物理的に作用するものである。いっぽう「まさきの綱」に撚り合

わされた月光は、これでもあなたは月のすばらしさを理解しないで帰るのですかと、心理的に作用するものとして用意されている。物理的側面と心理的側面の両面に訴える形で、行平を留めたいという気持ちを表わしているところに、作者の工夫を見て取るべきだろう。

四 「返し」について

行平の返しは贈歌の「まさきの綱」「撚り」をうけて仕立てられている。月が取り入れられていないところを見ると、行平は「月のおもしろかりけるに」の背後にある河原左大臣の不満に鈍感だったとの見方も可能であろう。月は関心の外にあったと考えることもできる。しかし、そう見るだけでは行平の返しにこめられた、左大臣へのメッセージを見落とすことになりかねない。河原左大臣は「照る月」と「まさきの綱」との道具仕立てで歌を詠み、行平に留まることを迫った。というよりも、留まることを求める自らの歌に行平がどのように応じるかを見たかった、と言った方が正確かもしれない。贈答歌がお互いの歌の技量を試し合うやりとりである例は枚挙にいとまがないからである。そう見た時、返して月に触れられていないことは、ただ月に関心がなかったと片付けるよ

りも、もっと積極的な意味を見いだすべきであるように思われる。行平は意識的に月を話題にしなかったのではあるまいか。せつかくの美しい月を愛でないで帰るのですか、との左大臣の非難に、彼は、私にはあなたに対する「限なき思ひ」がありますと応じた。「限なき思ひ」があればこそ、あなたとの絆は途絶えることはありませんし、人と人とを繋ぐための「まさきの綱」という物など必要ありませんとの返事である。左大臣が「照る月」「まさきの綱」と言った、いわば物で迫ったのに対し、「限なき思ひ」という心で応じたのである。多分に遊戯的な色彩の感じられる贈歌であるが、返しは遊戯的な色彩を脱色して、結果的に河原左大臣に対する辛辣な返答の形を取っていると言えよう。

注1 このことについては、すでに拙論「古今和歌集二十七番『浅緑糸よりかけて』の歌の解釈」（九州産業大学国際文化学部紀要第三号）で考察を試みた。

注2 小松英雄氏『やまとうた』（講談社）

注3 『古今集遠鏡』